梔子豉湯類の総論

梔子豉湯証の症候

虚煩，心煩，微煩者，煩按之心下軟者，不得眠，心中懊憹，心中結痛，胸中窒者，身熱不去，外有熱，煩熱，腹満（梔子厚朴湯）

え

梔子豉湯証は胸に鬱熱が存在する。

第76条「発汗吐下後」，第77条「発汗若下之」，第78条「大下後」，第79条「傷寒下後」，第80条「医以丸薬大下之」などの条文は，誤治あるいは過剰な瀉下の後，肌表の邪は胸に内陥し，胸において邪正闘争が惹起され，胸は熱を持つ。邪は，皮一胸，あるいは肌一心下一胸の二つの経路で胸に内陥する。第221条，第228条は陽明の誤下である。第375条「下利後更煩」，第393条「大病差後労復者」の条文は，肌表の邪の内陥によるものではない。誤下後，胸気は一時的に虚してしまい，邪も胸に至る。しかし胃気の回復につれて，胃気は胸に昇り，胸において邪正闘争が惹起され，胸は熱を持ち，胸の昇降出入が不利する。また下利後，あるいは大病後に邪が存在することは殆んどないが，胃気が回復すると鬱熱となる。

梔子豉湯証には，胸中に有形の飲や痰は存在せず，無形の熱（鬱熱）があり，そのために胸気不利が出現する。胸気不利のために胸の昇降出入は不利し，「煩」「心中懊憹*」「胸中窒者」となる。胸気不利の程度がさらにひどいと，「心中結痛」を生じる。

＊心中懊憹：胸がムカムカして吐きたくても吐けない。悶えるような不快な症状。

［外殻の熱］

梔子豉湯類の条文には次のような熱の症状がみられる。

第77条　発汗，若下之，而煩熱

第78条　大下之後，身熱不去

第80条　医以丸薬大下之，身熱不去

第228条　下之，其外有熱

これらの病理について考えてみる。

誤下・誤発汗により梔子豉湯証に発展するとき，始めに邪が存在する場所は，皮と肌の二つがある。

1）皮に寒邪がある場合。太陽傷寒

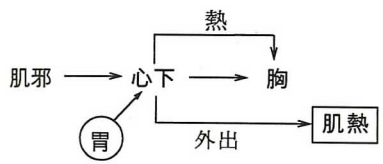
① 誤下・誤発汗により皮邪は皮から消失するが，一部化熱して胸に内陥して胸に鬱熱が生じる。

② 胸熱が心下に伝わり，心下も熱を持つ。胸熱のために胸気不利があり，胸・膈・心下の昇降が障害されると，心下の熱は肌に外出し，肌は熱を持つ（肌熱）。

皮邪 → 胸 → 心下 —外出→ 肌熱

2）肌に風邪がある場合。太陽中風

誤下・誤発汗により，肌邪は肌からは消失するが，一部化熱して心下に内陥し，その熱が胸に伝わる。



以上より胸の鬱熱により胸気が不利し，同時に心下も熱を持ち，心下も昇降できないため，心下の熱は肌に外出して肌熱となる。ただしこの場合，病理主体は胸にあり，心下の熱を清する必要はない。胸の熱を清し，皮に透表することで胸気不利は解消し，胸熱・心下の熱・肌熱ともに治癒する。

◆無形の熱について

梔子豉湯証は，胸に鬱熱が存在する。一種のカプセライズされた空

梔子豉湯・梔子甘草豉湯・梔子生姜豉湯

第76条　発汗後，水薬不得入口，為逆。若更発汗，必吐下不止。発汗，吐下後，虚煩不得眠，若劇者，必反覆顛倒，心中懊憹，梔子豉湯主之。若少気者，梔子甘草豉湯主之。若嘔者，梔子生姜豉湯主之。

「発汗後，水薬を受けつけなくなるのは，発汗が誤治であったからである。もしさらに誤発汗を重ねると必ず吐下が止まらなくなる。発汗，吐下の誤治後，虚煩して眠れなくなる。激しい症状のものは煩がひどく，寝ても立ってもいられなくなり，胸がムカムカして吐くに吐けない状態となる。これを梔子豉湯が主治する。もし少気のものは梔子甘草豉湯が主治する。もし吐するものは梔子生姜豉湯が主治する。」

発汗後，水薬を受けつけなくなるのは，発汗により胃の陽気が失われ，胃の受納作用が失われるからである。「為逆」について，ここでは「逆治」ととったが，「吐逆」と解釈する説もある。もしさらに誤発汗を重ねると，胃の陽気はますます虚してしまい，胃の守胃作用が失われ，胃気が上逆すると「吐」，胃気が下に漏泄すると「下痢」となって止まらなくなる。発汗，吐下の誤治後，虚に乗じて邪が化熱し，胸に内陥する。その結果，胸は鬱熱を持ち，その熱が心包に伝わって「虚煩」「不得眠」となる。胸の鬱熱の著しいものは，「反覆顛倒（煩がひどく，寝ても立ってもいられない状態）」「心中懊憹（胸がムカムカして吐くに吐けず，悶える状態）」となる。もし鬱熱により陽気が障害され，「少気（息切れしてハーハーする状態）」するものは，甘草を加えて胃気を補う。もし胸の鬱熱のために胸・膈・心下の昇降出入が不利し，胃中に飲の発生を見たものは「嘔」するので，胃飲を捌き，胃気の上逆を防ぐ意味で生姜（五両）を加える。

処方解説

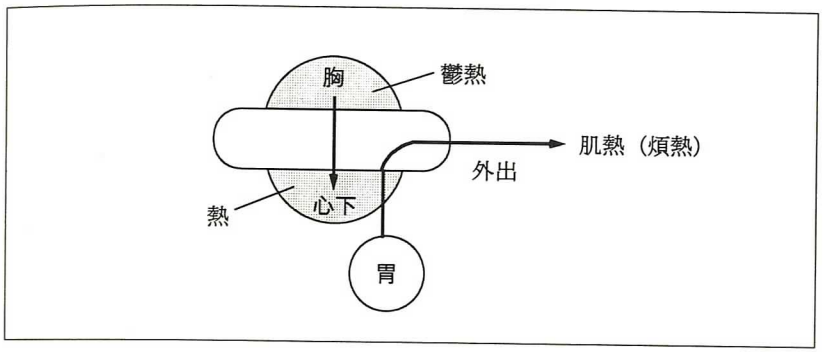
胸の鬱熱を山梔子で清し，淡豆豉で宣透して除く。胃気の不足するもの

は甘草（二両）を加え，胃飲の発生したものは生姜（五両）を加える。以後梔子豉湯類の処方解説は，基本的に総論で記しているので，省略する。

第77条　発汗，若下之，而煩熱胸中窒者，梔子豉湯主之。

「発汗あるいは之を下して後，煩熱し，胸中が塞がった感じのするものは，梔子豉湯が主治する。」

発汗あるいは瀉下した後に胸中に鬱熱が生じ，胸は塞がった感じになり，また心下にも熱が伝わり，そのため心下の熱は肌に外出して肌熱となり，その熱のために悶え苦しむ「煩熱」。



第78条　傷寒五六日，大下之後，身熱不去，心中結痛者，未欲解也，梔子豉湯主之。

「傷寒で五六日経過して，これを大下し，身熱が治らず結痛するものは，いまだ病が癒えていない。梔子豉湯がこれを主治する。」

傷寒病で五六日経過すると，少陽あるいは陽明の時期である。

第96条　傷寒五六日……与小柴胡湯主之。
第135条　傷寒六七日……大陥胸湯主之。
第147条　傷寒五六日……柴胡桂枝乾姜湯主之。
第252条　傷寒六七日……宜大承気湯。

①に近い条文としては，第374条「下利譫語者，有燥屎也，宜小（大）承気湯。」がある。しかしこの条文は，小承気湯ではなく大承気湯の条文であると考えるが，下痢は続いており，その原因が燥屎にあるので，これを小承気湯で下さないと下痢は癒えない。

②に近い条文としては第238条「陽明病，下之，心中懊憹而煩，胃中有燥屎者，可攻。……宜大承気湯。」，第241条「大下後，六七日不大便，煩不解，腹満痛者，此有燥屎也。……宜大承気湯。」，第250条「太陽病，若吐，若下，若発汗後，微煩，小便数，大便因硬者，与小承気湯，和之癒。」などがある。これらの条文は承気湯ではなく，別な処方，例えば丸薬，散薬で下法を行ったため，下痢が起こっても燥屎は除かれず，「煩」などの症状が残るものである。したがってこれらの条文の病理は似ているとはいえ，異なったものである。

本条文はもともと下痢と煩があり，下痢が止んだ後，煩はさらに酷くなる。下痢によって邪の大部分は去ってしまうが，虚した胸に胃気が昇って胸は熱を持ち，鬱熱となり，さらに「煩」することになる。ただし有形の飲・痰あるいは燥屎などは存在しないので，「按之心下濡者」と記し，有形の物の存在を否定している。「虚煩」は，燥屎（承気湯），痰（陥胸湯）などの有形の物の存在により煩する「実煩」ではなく，無形の熱による煩であることを表現している。これらの症状のあるものに対して，梔子豉湯がよろしい。

梔子厚朴湯

第79条　傷寒下後，心煩，腹満，臥起不安者，梔子厚朴湯主之。

梔子厚朴湯方　梔子十四箇擘　厚朴四両炙去皮　枳実四枚水浸炙令黄

上三味，以水三升半，煮取一升半，去滓，分二服。温進一服，得吐者，止後服。

第79条　傷寒下後，心煩，腹満，臥起不安者，梔子厚朴湯主之。

「傷寒の邪を下して後，心煩，腹満し，臥起不安なるものは梔子厚朴湯がこれを主治する。」

傷寒の邪を誤下したために，胸，胃，腹（小腸）の正気はいったん虚し，その虚に乗じて邪が内陥する。邪は胸から腹にかけて存在しているため，胸は熱を持ち，心煩，臥起不安（寝ても立ってもいられない。心煩の著しい状態であり，「反覆顛倒」よりは軽い。）を生じる。また腹部の邪のために腹満する。

処方解説

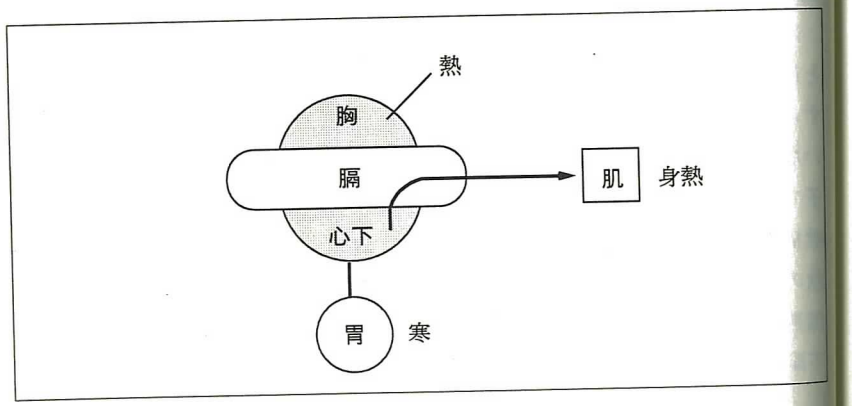
邪は胸から腹にまたがって存在しているため，胸の鬱熱を治す梔子豉湯とは治療法が異なっている。胸の鬱熱の場合は梔子で清熱し，香豉で宣透する。しかし梔子厚朴湯証は，腹にも邪が存在し，いまだ腑実には至っていないので，小承気湯から大黄を去ったものを用いている。胸の熱は山梔子で清し，香豉で宣透せず，枳実，厚朴で下降させる。金匱要略・痰飲咳嗽病脈証併治第十二26条「支飲胸満者，厚朴大黄湯主之。」では，胸に支飲のあるものに，厚朴一尺，大黄六両，枳実四枚を使用しているが，胸の無形の熱があるものは，梔子十四箇，厚朴四両，枳実四枚で清熱とともに下降（宣透ではない）させて，腹部の邪とともに治す。

梔子乾姜湯

第80条　傷寒，医以丸薬大下之，身熱不去，微煩者，梔子乾姜湯主之。
梔子乾姜湯方　梔子十四箇擘　乾姜二両
上二味，以水三升半，煮取一升半，去滓，分二服，温進一服。得吐者，止後服。

第80条　傷寒，医以丸薬大下之，身熱不去，微煩者，梔子乾姜湯主之。
「傷寒の邪を，医が丸薬でもって激しく下したが，身熱は去らずに微煩するものは，梔子乾姜湯が主治する。」

傷寒の邪を，巴豆などの入った丸薬で激しく瀉下する誤治を行う。大下のために，胃気は大量に失われ，胃は陽気が不足し，胃寒となる。邪が胸に内陥し，胸において回復した正気と邪との邪正闘争が起き，胸は熱を持つが，胃気がかなり弱っているため胸の熱は強くならず，「微煩」となる。胸の熱は心下にも伝わり，肌にも熱を帯びるので，もともと存在した傷寒による身熱が，あたかも存在し続けるように見えるが，この身熱は，傷寒によるものとは病理機序が異なっている。



処方解説

梔子で胸熱を清する。胸熱が清されれば心下の熱もなくなり，身熱も去る。乾姜は胃を温めて胃気を鼓舞し，大下により失われた胃気を回復させる。胸の熱は梔子豉湯よりは弱いので，梔子で清熱を行い，香豉で宣透する必要はない。